の飲酒と暴力、盗みも横行するようになってきた。食糧援助にもいっそう依存するようになってしまっ
た。圧倒的な外部の力に、プッシュマンはただ翻弄
されるばかりである。
しかし著者は、若手研究者の研究のなかに、プッ
ッシュマンのしたたかの力を見いだしていく。とたえ
ば著者は、丸山洪子の研究をとりあげる。丸山によ
ると、プッシュマンのなかには、町で食糧配布を
うけつつも、こっそりと町の外に小屋をつくり、狩
猟採集をおこなったり、農耕や牧畜をしたりする者
がでてきたという。また、小屋の位置を地図上にブ
ロットすると、かつてのゲームリザーブの集団関係
をそっくり写像するように分布しているという。つ
まりプッシュマンは、従来の人間関係を温存して暮
らしていたのである。著者は、こうした事実の中
に、プッシュマンのしたたかさを見とどるのであ
る。
自然に埋没して暮らしていた頃のプッシュマンを
知る著者にとって、変容していくプッシュマンの姿
を見るのは堪え難いことのようだ。けれども、それ
は著者が慣古主義者であるからではない。むしろ著
者は、外部世界からの強い圧力の中で、プッシュマ
ンが彼ららしく生きる道を模索し続けてきたといえ
る。
その一つの表れが、学際的な地域研究の推進であ
る。プッシュマンには2名もの日本人研究者が長期
調査に訪れた。その学問分野は、人間行動学、生態
人類学、文化地理学、人文地理学（民族昆虫学）、
言語学、社会心理学などの広がりを持ち、さらに短
期調査者も含むならば寄生虫学、内科学、開発経
済学、先進人類学・考古学、土壤学、熱帯作物学を
専門とする研究者が訪れている。
さらに著者は、学際的な研究をもとに、プッシュマ
ンの伝統的生活を尊重した開発の試案を述べてい
る。その一つの柱は、隠国ナミビアが実施している
方式を参考にした分散居住様式の採用であり、もう
ひとつの柱は生業の発展である。後者については、
賃金労働・民芸品の販売などこれまでここなされて
きた活動に加えて、プッシュマンの能力を生かした活
動（野生生物局への雇用、ガイド、皮革製造業）
などが提案されている。さらに脆弱なカラハリ砂漠
でも可能な半栽培的な農業のありかたについても述
べている。これらの提案は、カラハリに集う研究者
たちの意見をふまえた結晶と言えるだろう。
近年、地域名を冠する学会においても、専門分野
ごとに会場がかれ、タッソ的風潮が生まれつつあ
る。総合的な地域研究が掛け声でされていると
の批判も聞く。けれども、人類学が総合の学である
とするならば、学際的研究を推進してきた著者の態
度を、我々は真摯に学ぶべきだろう。
以上、簡単に本書の内容を紹介してきた。本書
は、一般読者や、人類学・地域研究に関心のある初
学者に、プッシュマン研究の総括的な情報を提供し
てくれる良書であるが、むしろ農の乗った中堅の人
類学者にこそ読んで欲しいと思う。人類学者の多く
は、それぞれ異なるフィールドに独りで入り、孤独
に論考をまとめあげていく。そうした嘆きは尊いも
のであるが、著者が実践した学際的な地域研究や人
類学的研究は、私たちにフィールドワークの新たな
可能性を示していると思うからである。
あとがきによると、本書は筆者の研究のひと区切
りなのだという。けれども、本書が田中二郎の最後
の著書になるとは思えない。京都大学を定年退官し
てからも、アフリカ大陸を縦断するなど、著者の
行動はより奔放さを増している。広域踏査のなかか
ら、今度はどんな著作があらわれるのか、読者の
ひとりとして期待せずにいられない。

橋健一著
『<他者／自己> 表象の民族誌——ネパール先住民チェバンのミクロ存在論』
東京、風響社、2008年
330頁、5,000円(+税)

山本達也

本書は、著者が2005年に東京外国語大学に提出し
た博士論文『市民という名の民族——ネパール、プ
ラジャにおける四つの異人表象から見た象徴世界と
民族的自己イメージに関する研究』を加筆修正した
ものである。本書は、1989年から2008年に集められ
た資料と、著者の切れ味鋭い洞察によってチェバン

* 国立民族学博物館外来研究員
の人々の生活とその変遷をとらえた良質な民族誌である。

本書が目指すのは、先住民チェバンによる他者表象から自己形成を探り出すことにより、チェバンの人々が生きる象徴世界の多層性を記述し、『伝統文化』と民族、国家や開発とののかかわりを歴史的人類学的に分析することである。また、著者は本書をチェバンの人々（もしくはそれを越えた人々）がアイデンティティ構築の資源として用いることができるようにすることも意識している。本書はツールとしての民族誌記述をとらえがちなものであると言えようだろう。著者が調査を開始した当初、チェバンの人々は部分的な狩猟採集を行ない、独自の信仰体系をもっていたが、著者が調査を進めていくなかで、その生活は大きく変化していくことになる。こうした状況にツールとして関わっていく民族誌が本書である。

本書の装いは、形式、内容ともに極めて野心的なものである。まず、形式のほうからみてみよう。本書の構成は以下のとおりである。

はじめに
第一章 序論
第二章 チンランの象徴世界
第三章 チョールの象徴世界
第四章 サールの象徴世界
第五章 ドゥキの象徴世界
結論 チェバンとは何か

このように、本書の構成は固有名詞によって区切られており、一見したところ読み手に難解な印象を与える。しかし、この形式は、著者が描き出すとすると内容は不可分であり、まさにその内容を要請したものである。タイトルとして各章に配された固有名詞は、著者に向けてチェバンの人々が拡げた他の表象であり、著者はこれら固有名詞を導きの糸とし、チェバンの人々にとっての多様な他者と自己の姿を浮かび上がらせようとする。これらは、著者が思索を展開していくための触媒なのである。

ツールとしての民族誌記述を目指す本書はまた、形式同様野心的な内容を伴っている。第一章において、本書が1990年代以降の議論に依拠することが示される。特に、記述の対象とされる人々の自己表象としての文化やその創造性に肯定的に着目するアラン・マクファーレンや田原好信の議論を自己表象論として位置づけ、批評的に継承していく。まず、著者はこれらの議論の問題点を、①調査者がエリートの語りへ着目することによる表象されない存在の形成、②民族誌記述が現実階層性や不平等性、という二点にまとめ、議論を展開する。①に対し、著者は、「表象的資源としての民族誌」を提唱し、民族にとっての自己のあいだのルーツを示しつつ、同時に自己のあいだの同一性を抽出することで、民族内の対立を排除する作用する民族誌の作成を試みる。

②に対しては、まず著者は、階層性を明確化するために、下から上に向かって、象徴体系のなかで生きる主従としての民族（普通の人たち）、民族主体をその外部から客体としてみる人々や人類学者（「西洋」やエリート）、人類学者の権力性をその内部から批判するサイド的知識人＝メタ人類学、という三層を見取り図として設定する。そのうえで、階層の指摘とその不平等の解消を試みた点でメタ人類学を一定評価しつつ、そこでにおいても解釈を行なう人類学者が結局のところ対象化されずに最上段に位置していると批判する。また、メタ人類学が、エリートの語りに着目する結果、最下層におかれた普通の人々を問い込み、結局のところ主体性を奪ってしまう、と著者は指摘する。こうした問題点を克服するために、著者は、最下層の人々が生活のなかで行なう意味づけと、人類学者による対象への意味づけとは、文化的に対象化された象徴に対することは意味づけである点で双方とも象徴体系として理解可能であり、各階層への分化は、それぞれ個別象徴体系の中での生活が示していることを示すものである、として象徴体系の相対化を図る。さらに著者は、運動（ここではまばたきという筋肉運動をどのように対象化し解釈していくか、という問題を提起される）という概念に着目し、最下層のなかにも階層性を探る。この運動という概念を上位の階層に持ち込むことで、解釈や意味づけも運動として理解し、相対化を図り、先の象徴体系という概念と結び付ける。著者は、自己表象論を、本来は相対化できる世界が、現実的な支配として階層化されている状況に対し、支配に抵抗し、階層を突き崩す議論であると位置づけ、こうした概念を加え
このように対照的に、現実的な存在として語られるチョールを題材として、国民国家のなかのチェバンが語られていく。チョールとは泥棒を意味し、ネパール政府がイギリスによる侵略的脅威に対する防御壁とした大きな森に住むと言われ、ラナ家制（1846年から1951年）に現れた存在であり、チェバンにとっての昔と関係づけられて語られる。本章では、チョールを媒介にして、チェバンの人々が、自らとともに森に関係づけられて語られるクンサという部族を、インドゥー的な習俗の有無から自分たちよりも未開の存在であると位置づけると同時に、まさにそのインドゥーの秩序のなかにおいて、国家からは未開として位置づけられるままが描かれる。チョールという存在が、森に対するイメージを生み、国民としてのチェバンを想像する契機を与え、それは、排除と包摂を同時に生きる状況を生みだしたのである。

第四章で論じられるのは、サールを通じた経済の象徴体系である。サールとは先生を意味し、学校教育や政治活動、開発というかたちでチェバンのもとでやってくる人々である。読み書きを通して生活水準を引き上げるためにやってきたサールだが、彼らの出現はチェバンの人々に「賢い／愚鈍なる」という学歴基準の階層性を形成した。チェバンはサールに比して自らを下位に位置づけ、それは政治演説や開発、市場との結びつきの強化のなかで加速していく。このように、サールとは外部からのチェバンに物質とともに階層性を持ち込む存在である。サールがもたらしたのは、肉の贈与とは異なる国家や市場の論理であり、そこにはネパール国民らしい知識や身体、貨幣の有無によって分類や評価がなされる。やがて、チェバンの人々は自らを排除し市場の論理で動くサールたちを「恥知らず」と位置づけ、自分たちの世界から排除し始めるが、象徴体系の変化の結果もたらされた貨幣や知識の有無という問題は解決されず、結果的にチェバンかサールか、という二項対立に閉じ込められてしまう、と著者は論じる。それは、上位が下位の語りを顕聴しないことがたたら判決である。

第五章のドゥキは、これまでの固有名詞群と趣を異にするものである。ドゥキとは苦痛に悩む人を意味し、「最後まで残された者」である。ここでは、こうした周縁的存在を受け入れる象徴世界が、著者
食肉や贈与の世界において秩序を維持しようとする存在であり、ヒンドゥーの世界観への従属により地位を排他しつつ、自らはヒンドゥー的重層的なつながりを生かす存在である。そして、こうした開発の論理自体を問い返し、現実的な自己に働きかけ、周辺的な存在と新しい連帯の可能性を探る存在、それぞれ著者が見出したチベットの重層的な姿である。著者は論文において、チベットの象徴世界の生活とチベットの象徴世界的現実が示すような「大きな歴史」（歴史の歴史）にミクロな次元が抵抗し、別の運動を展開するミクロ存在論を、個別で階層的なサールたち、別や平等、遠慮という世界観を生きるチベットの人々とのやりとりのなかに見出す。こうしたサールたちはチベットの感覚を少しずつ理解し、彼ら自身の象徴体系を変化させていった。著者は、こうしたミクロ次元の運動が上位に接続されていく過程を、異なる階層が同一性によってつながる調停や和解として捉える。そして、ドゥキとして接続された著者自身もチベットのミクロな運動と共鳴する。しかし同時に、異なる存在同士を同一性に結びつける抽象思考を現実の生活に引き戻す必要を主張する。抽象的観念での同一性は、つねに具体において問い返されなければならな

本書の最後には、著者が調査地を再訪したときのことが描かれている。チェンの人々を取り巻く状況は大きく変化し、ほとんどの人がギリシャ教に改宗し、チンランの象徴世界はその姿をとどめていなかった。しかし、著者との再会により、人々はかつての生活に思いをはせ、現在の彼らの世界にかつての象徴世界にかかわる語りが現れる。人と人との出会いが世界と世界のあいだのあり方に運動をもたらし、象徴体系の組み替えが起こる。著者の、自らの民族誌記録を資源として用いる姿勢は、まさにここにおいて意味をなす。

さて、冒頭で指摘したように、本書は極めて野心的な作品であるが、同時に困難を抱え込んでいる。ここで形式、内容に関して簡潔に一点ずつコメントしたい。まず、形式である。固有名詞を導きの糸として議論を展開していくその手法は、構成という点から極めて興味深く、数章に関してはその試みが検出しているといえる。だが、第二章のチンランにかかわる章は、過積載であると言わざるをえない。著者は、チンランを対極としてチェンそして世界の村にとっての人間を問うているが、結婚に関する議論までは整合性を保っているものの、系譜に並ぶ議論になると、チンランの面影は薄れ、ショーカーな新たな固有名詞が登場するなど、議論が不明瞭になっていく。

そして、本書が依拠するミクロ存在論に関しても述べておきたい。ミクロと聞くと、著者は田中によるミクロ人類学[田中2006]を思いつぶべる。実際、著者も注視において田中に言及しているのだが、田中らの議論に対する著者の議論の位置づけが不明瞭なため、その差異が何かなるのかはわからにくい。著者はイジェンシーを棲立する田中らの議論が存在論的側面を欠くとは思わない。また、著者の指摘する象徴体系は、うがかった見方をすれば言説の体系である。ただし、本書の議論のほうがよりシステム的にあるもの、存在の姿容を描くのが目指す方向ならば、田中らの議論とそう大きく違わないのではないか、という見方もできる。こうした位置づけの問題は、結局的に本書に顕発する「存在論」、「存在論的」という言葉を空虚なものとするに至っている。存在論という言葉を用いるならばならない必然性がここには残念ながら見えてこない。

とはいえ、本書が目指そうとする方向性は極めて
興味深く、以後の議論の展開を早く見てみたい、とい\nうのが読者の見解である。本書は著者によるミク\nロ存在論の第一歩であろうし、今後それは深化して\nいくのと予想される。エイジェンシーとは異なっ\nた方向からなされる議論は、今後の発展次第では、\n文化人類学内部の議論を活発化することになるだら\nう。

参照文献
田中 雅一
2006 「ミクロ人類学の課題」「ミクロ人類学の実\n践——エイジェンシー／ネットワーク／身\n体」 robots雅一、松田素二（編）、pp. 1-37、\n世界思想社。

片岡樹著
『タイ山地—神教徒の民族誌——キリス\nト教徒ラフの国家・民族・文化』
東京、風響社、2006年
390頁、6,300円（税込み）

馬場 雄司*

本書は、タイ山地民の中でも特にキリスト教徒が\n多いといわれるラフに焦点をあて、彼らの民族意\n識、伝統文化を目的に示す国家について、村落\n生活の中から描き出した民族誌である。著者は、元\n来、タイ国民統合問題に関心を抱いており、周縁\n者の視点から近代国家をとらえなおすことを意図し\nていた。こうして仏教伝が主流の「タイ人」のイメ\nージから最も遠い「山地民キリスト教徒」がその対象\nとして選ばれた。著者がそこで目になったのは、「伝\n統を捨てずかえて民族意識を活性化させる山地民\nの姿であり、また同時に「この世の出来事を超\n越して存在する創造主をたる唯一の神」との論理であっ\nた。そこでは、キリスト教は全ての民族が帰依すべ\nき唯一の普遍的真理とされていた。この意味で外来\nキリスト教がいかに土着の伝統や民族主義をもすび\nつくかという問題は、「一神教の教理をどう理解す\nるか」という問題の延長線上におかれるべきもので\nあるが、この点は、その多くがキリスト教徒である\n西洋人研究者にはあまりまえであるがゆえにみのが\nされていたのではないかと著者は述べる。このような\n問題意識のもと、彼岸の「唯一の真理」と此岸に\nおける被物の多様な現実との緊張関係というこれ\nまで注目されてこなかった現実の理解にエネルギー\nが注がれることになる。タイトルの「一神教」と「民\n族誌」という二つの言葉は、この矛盾を象徴し、か\nつその統一理解をめざそうとする意図を端的にあら\nわっている。

本書は、著者が2004年に九州大学に提出した学位\n論文を改稿したものであり、以下の9つの章からなる。

第一章 「一神教の視点からの文化理解」
第二章 「国家の拡張—歴史的背景」
第三章 「ラフ宗教史にみる「信仰の干渉」」
第四章 「亡国の民」の形成」
第五章 「ラフであること」をめぐって」
第六章 「合理化と平信徒」
第七章 「疲れたいこの世を生きる」
第八章 「現代タイ国とラフ」
第九章 「結論」

以下、簡単に内容を紹介してみたい。

ラフの宗教的歴史観の基本構造は、世界の創造者\nたる至高神グシャ（ネ）からなる「一神教の\nアノニムズ」を呼ぶ二重構造である。清朝中期、\nラフは、衰退したシャン系諸王国から自立、大乗仏\n教の流入を契機として「ラフの国」を成立させる。

宗教的歴史観の二重構造は、この過程で仏教的諸觀\n念と土着神格の一体化によって形成されたと考えら\nれる。「ラフの国」は、ビルマを植民地化したイギ\nリスに対抗する清朝の防務政策のもとで作られ、そ\nの後、頒布する千年王国運動を経て、国民国家の少\n数民族となり現在に至る。大乗仏教の影響は消滅し\nし、平地タイ系のキリスマ僧（上座部教徒）に帰依\nする集団、キリスト教徒に改宗する集団が現われ\nる。この過程で、至高神グシャは、子言葉やキリス\nマ僧、イス＝キリストとも同一視されていく。

* 京都文教大学